

◆ 実戦問題 23 ◆

(女流歌人である*宮内卿の若き頃のエピソードである。)

*この千五百番の歌合の時、*院の上のたまふやう、「今度は、みな*世に許りたるふるき道の者どもなり。宮内は*まだしかるべけれども、*けしうはあらずと見ゆ。ばなむ。かまへて、朕が面起こすばかり、よき歌仕うまつれ」と仰せらるるに、(2)面うち赤めて、涙ぐみて待ひける気色、限りなき*好きのほど、あはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとどりなる中に、

(3)*薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけるほどを、おしはかりたる*心ばへなど、まだしからむ人は、いと思ひよりがたくや。この人、(4)年積もるまであらましかば、げにいかばかり*目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せにし、いとほしく(6)あたらしくなむ。

千葉大(教)
同志社大(法)
出題文

設問

問1 文中の空欄には、視覚によって推定したことを表す助動詞が入る。ふさわしい活用形に直して記せ。

問2 傍線(1)の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ①正面から立ち向かう ②とても満足する
③面目をほどこす ④体面を失う

問3 傍線(2)のようにしたのはなぜか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ①未熟な自分を励ましてくれた和歌の達人たちの好意に感動したから。
②よい歌を詠んでほしいという皆の期待に応えられない自分が恥ずかしかったから。

③まだ一人前でない自分を試そうという院のたくらみを恐れ多く思ったから。

④経験の浅い自分の歌才を認め、温かく励ましてくれた院の言葉に感激したから。

問4 傍線(3)の歌はどのような点ですばらしいのか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ①野辺の若草の薄いようで濃い緑を見て、去年の雪の色を思い出した点。
②野辺の若草の緑の濃淡から、去年の雪のまだらに消えるさまを推測した点。
③野辺の若草の緑と、去年の雪の白さを対比させて視覚的にとらえた点。
④緑が濃い若草と、緑が薄い若草と、白い雪とを鮮やかにとらえた点。

問5 傍線(4)を現代語訳せよ。ただし、「目に見えぬ鬼神をも動かし」は「すばらしい歌を詠み」と訳す。

問6 傍線(5)(6)の意味を記せ。

出典

『増鏡』は、十四世紀中頃成立の歴史物語。作者は未詳である。後鳥羽天皇から後醍醐天皇までの約一五〇年間の歴史を、編年体で記してある。

*宮内卿＝鎌倉時代初期の女流歌人。後鳥羽院に女房として仕えた。

*この千五百番の歌合＝建仁二年(一一〇一)に、後鳥羽院を始め男女三十人の歌人が左右に分かれ、それぞれ百首の歌を詠んだ。

*院の上＝後鳥羽院。
*世に許りたる＝世間で認められた。

*まだしかるべけれども＝未熟であるようだが。「まだしかる」は形容詞「まだし」の連体形。

*けしうはあらず＝まずまずである。たいてい劣っていない。
*好きのほど＝歌に熱心なこと

の深さ。
*薄く濃き野辺の緑の若草＝ある部分は薄く、ある部分は濃い野辺の若草の緑。春先の若草の緑の濃さがまだらであるさまをいう。

*心ばへ＝歌の趣向。
*目に見えぬ鬼神をも動かし＝『古今和歌集』の「仮名序」に、「和歌というものは、力を入れずに天地を動かし、鬼神を感動させる」とあること

による。ここでは「鬼神を感動させるほどの、すばらしい歌を詠む」の意。

単語チェック

- ☑仕うまつる 動 ラ四
☑疾し 形 ク
☑いとほしく 形 シク
☑あたらし 形 シク